



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3431 号 2016.12.31 発行

6次化 障害者就労支援 クック・チャム（新居浜）子会社にアクティブ賞 北海道で農



業や食堂展開 愛媛新聞 2016年12月30日
農作業をする九神ファームめむろの従業員=7月、北海道芽室町（クック・チャム提供）

総菜製造販売のクック・チャム（新居浜市、藤田敏子社長）が北海道芽室町で展開する子会社「九神ファームめむろ」が、農林水産物や地域資源を生かした活性化の取り組みを顕彰する政府の「ディスカバー農山漁村の宝」の30選に入り、このほど特別賞の一つであるアクティブ賞に輝いた。

九神ファームめむろは就労継続支援A型事業所の認定を受け、2013年4月に開所した。障害者や高齢者を中心に農業、総菜製造、レストラン営業を一貫して手掛ける。6次産業化の手本として障害者の通年雇用を実現し、地域に社会参加や生きがいの場を提供している点が評価された。

藤田社長は「知らない土地で農地経営ができるのか不安はあった。誰もが当たり前で働いて生きていける場をつくるという考えに、地域の人たちが賛同してくれた」と受賞を喜んだ。

めむろは敷地面積約6万6千平方メートル。ジャガイモなどを栽培する畑や総菜工場（175平方メートル）を設け、障害者24人を雇用している。年商は約9千万円。

17年1月に新たな総菜工場が完成する予定。藤田社長は「全国の特別支援学校の生徒に修学旅行で、めむろに来てもらう計画を進めている。観光と農業体験を通して、障害のある人に働くことの意味を知る学びの場にもしていきたい」と今後の抱負を語った。

政府は「農山漁村の宝」を「むらのたから」と読ませてキャッチフレーズにし、地域活性化の取り組みを募集した。3回目となる今年は769件の応募があり、政府の有識者懇談会が10月に成功例として30団体を選んだ。その中から優れた5事例が選出され、北海道別海町の「べつかい乳業興社」が最優秀賞に当たるグランプリを受賞した。



1月、障害者専門の医療福祉施設開業 福岡県糸島市

西日本新聞 2016年12月30日

福岡県糸島市では初の障害者専門の医療福祉施設「糸島こどもとおとなのクリニック」=写真=が1月4日、同市志摩井田原で開業する。

運営は佐賀市の社会福祉法人「佐賀整肢学園」。クリニックは2階建てで、延べ床面積1486平方メートル。1階が、脳性まひやダウン症、知的障害、自閉症、

発達障害などの診療や、装具関係の処方を行う医科・診療部門。2階には、理学療法室と作業療法室3室、言語訓練室6室を備えたリハビリテーション部門が配置されている。

このほど落成式があり、市丸智浩院長は「地域のお役に立てるよう頑張りたい」と話した。見学などの問い合わせは佐藤事業室長＝080（8582）1675（午前9時～午後5時）。

障害者差別解消法 「拒否」か「配慮」か 双方歩み寄りを



毎日新聞 2016年12月30日
意見交換する県職員と参加者ら＝高松市内で2016年12月24日午後、待鳥航志撮影

障害者への「配慮」なのか、「差別」なのか、その線引きを巡り、市民団体と行政との間で意見交換が24日、高松市内で行われた。今年4月に施行した「障害者差別解消法」は、行政機関や民間事業者に、障害者に対し「合理的配慮」を求めている。しかし、その判断は人によって違うのが実態。「安全のため」と説明され、事実上、利用

を拒否されたと感じたという障害者側の意見も出て、運用の難しさが改めて浮き彫りになった。【待鳥航志】

重症心身障害者の就学 どんな人の命も大事 /青森

4月、県立浪岡養護学校で行われた入学式。谷川さんも参列した中、50代の重症心身障害者2人が小学部に迎えられた＝同校で

初めて会ったのは、青森に赴任して間もない4月初めだった。「青森県重症心身障害児（者）を守る会」の会長、谷川幸子さん（64）。法制度の問題で義務教育を受けられなかった50代の重症心身障害者が、半世紀越しに県立浪岡養護学校（青森市）の小学部への入学を果たすとの話、その背景から丁寧に語ってくれた。

「一生のほとんどを病院で過ごす重症心身障害者にとって、学校生活は人生が輝き、本人が成長できる貴重な時間なんです」。実感のこもった言葉は、今も印象に残っている。

1男4女の母である谷川さんの三女ひかりさん（33）も、重い障害を持って生まれた。

毎日新聞 2016年12月30日



初詣に「雪丸願い札」 読売新聞 2016年12月30日
大みそかに発売される「雪丸願い札」。達磨寺の掛け所（後方）につるす（王寺町で）

◇あす王寺で発売 障害者ら手作り

王寺町のゆるキャラ「雪丸」の顔をかたどった絵馬「願い札」を、町観光協会が作製した。初詣に向けて、同町の達磨寺で31日午後11時に先行発売する。

吉野産のヒノキ製で縦横12センチ、厚さ8ミリ。同町畠田のNPO法人「なないろサーカス団」が運営する

福祉作業所で、障害者らが1個ずつ手作りした。税込み500円。

達磨寺と、大阪や奈良を見渡せる町内の明神山山頂に、掛け所を設置。参拝者は裏面に

願い事を書いて、つるす。

雪丸は聖徳太子の愛犬がモデルで、人の言葉を話し、達磨寺に葬られたとの伝説がある。町観光協会は「賢い雪丸なら学業成就の願いを届けてくれそう。カップルの聖地の明神山では恋愛成就祈願がお勧め」とアピールする。

先行発売は200個限定。一般販売は1月4日から達磨寺で。

一つずつ違う表情 三木の障害者ら、干支飾り制作 神戸新聞 2016年12月31日



利用者が協力して作った鶏とひよこの干支飾り＝三木市口吉川町楯原、じゃがいもの家

兵庫県三木市口吉川町楯原の生活介護事業所「じゃがいもの家」に通う知的障害者19人が、来年の干支（えと）「酉（とり）」にちなみ、鶏とひよこの飾り約300個を作った。のれん玉にフェルトを付けて頭や胴体にしており、扇を背に寄り添って座る姿が愛らしい。

高さ5センチ、幅7センチ、奥行き5センチ。綿を丸める▽のれん玉に色を塗る▽土台のベニヤ板を切る一などの作業を利用者が協力して担い、1体ずつ表情が異なるのが特徴だ。

制作は10年目を迎え、楽しみにしているファンも多い。10月ごろから問い合わせが入り、20個まとめた予約もあったという。

300円。年明けの販売は1月4日からで、同事業所や市役所のほか、火曜と金曜の午前は三木みらい館（同市緑が丘町西4）でも販売する。じゃがいもの家TEL0794・88・0403（大島光貴）

高知新聞 2013年連載「エリンちゃんは不思議ちゃん」続編 1/6～



高知新聞 2016年12月30日
「冬のしあわせ ～tea time」 (イラスト・エリン)

高知新聞すこやか面では2017年1月6日から、「エリンちゃんは不思議ちゃん アスペルガーのわが子と共に」の続編を連載します。

「エリンちゃん」は発達障害の一つである自閉症スペクトラムの女の子。その中でもアスペルガー症候群の傾向が強いと診断されています。

今回は2013年1月から20回、エリンちゃんのお母さん「メイシーさん」のエッセーやエリンちゃんの4コマ漫画などを掲載しました。小学校時代を中心に、発達障害と分かるまでの苦労や学校での出来事、社会との関わりをつづり、反響を呼びました。

続編は中学校時代を振り返ります。エリンちゃんの4コマ漫画に加え、コメントも紹介します。友達や親との関係がより複雑になる思春期。エリンちゃんは葛藤をどう乗り越え、お母さんはどう支えていくのでしょうか。どうぞ楽しみに。

<精神保健指定医>90人以上、医業停止へ 資格不正で処分

毎日新聞 2016年12月31日

◇厚労省、期間は1～2カ月の見通し

厚生労働省は、精神保健指定医の資格の不正取得について、2016年に資格取り消しとなった医師89人に行政処分を科すことを決めた。大半は診療行為を禁じる「医業停止」となる可能性が高い。取り消し前に資格を返上した医師6人も対象となる見通しで、90人以上の精神科医が医療行為をできなくなれば、地域医療に影響が出る恐れもある。

厚労省は対象者の弁明を聞く手続きを始めており、来年3月にも医師の処分を決める医道審議会に諮る。医業停止期間は1～2カ月になる見通しだ。

資格の不正取得は15年に聖マリアンナ医科大病院（川崎市）で発覚。他の医師が診察してまとめた症例レポートを使い回して審査を受けていた医師と、それを見逃した指導医計23人が取り消された。その後、厚労省が全国調査を実施し、指定医49人、指導医40人の不正が発覚。16年10月に資格取り消し処分を決めた。

聖マリアンナ医大のケースでは指定医が医業停止1カ月、指導医は同2カ月の行政処分を受けた。今回もこれに準じた処分になるとみられるが、これだけの規模の精神科医が一斉に医業停止になった例はない。特に、指定医は一定の経験のある中堅以上が多く、病院の精神科トップや開業医もいるため地域医療への影響が心配される。このため、厚労省は関係する自治体に対応を検討するよう求めるとみられる。

精神保健指定医は、自傷他害の恐れがある精神障害者を措置入院させるかどうかなどを判断する権限を持ち、診療報酬上の優遇もある。厚労省の資格取り消し判断を巡っては、一部医師が判断取り消しを求める訴訟を起こしている。【熊谷豪】

児童虐待 精神的な負担かけない「司法面接」始めてます 毎日新聞 2016年12月31日



虐待などの被害に遭った子どもに精神的な負担をかけずに話を聞くための専用部屋。ソファに腰かけ、ホワイトボードを使うこともある＝東京都千代田区の東京地検で、中村藍撮影

警察、検察、児童相談所が連携 配慮しながら原則1回で

捜査機関などが、虐待を受けた子どもから精神的な負担をかけないように状況を聴取する取り組みを始めている。「司法面接」と呼ばれる手法を取り入れたもので、これまでは別々に話を聞いていた警察、検察、児童相談所が連携。子どもの

特性や気持ちに配慮しながら代表者が原則1回で聞き取る。専門家は「被害児童に寄り添った対応で関係機関はさらに連携すべきだ」と話している。【飯田憲】

社説：給付型奨学金 学ぶ意欲ある若者への支援に 読売新聞 2016年12月31日

低所得世帯の大学生らを対象とした返済不要の給付型奨学金を、政府が創設する。

進学する意欲があるのに、経済的事情で断念せざるを得ない生徒を後押しする制度だ。有効に機能させたい。

本格実施は2018年度からだ。大学や短大、専門学校への進学者に対し、自宅か下宿か、私立か国公立か、などに応じて、月2万～4万円が給付される。

国による給付型奨学金制度を設けていないのは、経済協力開発機構加盟国では、日本とアイスランドだけだという。

対象となる住民税非課税世帯の進学希望者は、全国で1学年約6万人とされる。そのうち、給付を受けられるのは約2万人だ。全国の高校から、学業や課外活動のほか、本人の意欲や家庭の事情も踏まえて推薦してもらう。

親が十分な教育費を捻出できず、成績が伸び悩む生徒もいる。高校間の学力差も大きい。

一律の成績基準を設けず、現場に判断を委ねる仕組みは理解できる。各校は生徒を総合的に評価して、向学心のある子を選んでほしい。

大学進学率が5割を超える中、学費や生活費の工面に苦勞する学生が増えている。年間の授業料は私立で平均86万円、国立でも54万円かかる。保護者の負担は重い。昼間部の大学生の半数が、何らかの奨学金を利用している。

国の奨学金は現在、無利子と有利子の貸与型しかない。独立行政法人・日本学生支援機構を通じて132万人が利用している。

学生は大学卒業時に平均310万円の借金を抱える。非正規雇用で返済に苦しむ人も多く、3か月以上の滞納者は17万人に上る。

低所得世帯ほど将来の負担を懸念して、「借り控え」をする傾向もある。教育の機会均等の観点からも、新たな制度を創設する意義は小さくない。

21年度以降は、年間220億円の財源が必要になる。「未来への投資」に対する社会の理解を得るため、入学後の成績などを確認することは、欠かせない。

新制度導入後も、無利子の貸与型奨学金を併用できる。アルバイトに追われず、学業に専念できる環境整備が大切だ。

無利子の貸与型奨学金には、卒業後の所得に連動した返済制度が来年度から導入される。返済期間の一層の延長などの工夫も必要だろう。大学にも、授業料減免の拡充といった努力が求められる。

熱意ある若者を、重層的に支援する態勢を整えたい。

社説：高齢者の負担／抜本改革を先送りせずに 神戸新聞 2016年12月31日

年金や医療、介護などの社会保障制度で、2017年度から高齢者の負担増が相次ぐ。

一定以上の収入のある70歳以上の高齢者を対象に、自己負担を抑える「高額療養費制度」の上限を17年8月から引き上げる。75歳以上の後期高齢者医療制度では、所得が低い人の保険料を軽減する特例を4月から縮小する。いずれも17年度の政府予算案に盛り込まれた。

年金制度では、物価の下落に応じて年金額を改定する仕組みを適用し、4月から支給額を0.1%引き下げる。14年度以来3年ぶりの引き下げで、公的年金を受給する約4千万人に影響が出るという。

所得が高い高齢者には能力に応じて負担してもらおう。増大する社会保障費を現役世代の負担だけで賄いきれないのは明らかで、方向性は間違っていないだろう。

ただ、所得をどこで線引きするかは難しい。当初の負担増案に中間所得層も含めたため、与党内から反発が強く、高額療養費の引き上げ幅などを縮小した。実施にあたってはきめ細かな対応が求められる。

18年度以降も高齢者の負担は増える。介護保険制度では18年8月から、所得が高い高齢者を対象に利用時の負担を2割から3割に増やす。中間所得層も月額負担の上限額が引き上げられる予定で、来年の国会に介護保険法改正案が提出される。

臨時国会で成立した年金制度改革法では賃金の下落に応じて支給額を引き下げる新ルールが導入された。21年8月から、賃金が下がれば年金額が減ることになる。今の高齢者に対する給付を抑制すれば年金財政に余裕が生まれ、将来の支給水準が上がると、政府は説明している。

しかし、団塊の世代が75歳以上となる25年度には、年金や医療、介護など社会保障の給付費が今より約30兆円も増え、148.9兆円に膨らむ。そのときに年金だけでなく、医療や介護の負担と給付はどうなるのか。政府は将来像を示すべきだ。

安倍政権は、旧民主、自民、公明の3党が合意した「社会保障と税の一体改革」を事実上反故（ほご）にし、目先の選挙対策で消費税増税を2度延期した。その陰で、高齢者を中心にじわじわと負担増が進む。これでは老後の不安が募るばかりだ。社会保障制度の持

続を可能とするための抜本改革を避けてはならない。

社説：ニッポン2016年 このまま流されますか 朝日新聞 2016年12月31日

2016年が終わる。

世界中で「分断」「亀裂」があらわになった。

ニッポンは、どうか。

「言葉」で振り返る。

政治では、悲しいかな、ことしもカネの問題があった。

「私の政治家としての美学、生き様に反する」

業者から現金をもらった甘利明経済再生相は1月に、こんな発言を残して閣僚を辞めた。その後の国会を「睡眠障害」で欠席し、関係者の不起訴が決まると、さっさと復帰した。

「公用車は『動く知事室』」

東京都の舛添要一知事は公用車で別荘通いや、1泊20万円のホテル滞在で袋だたきにあった。そのうえ政治資金の私的流用を「せこい」と酷評され、6月に知事の座を追われた。

「飲むのが好きなので、誘われれば嫌と言えない性分」

700万円近い政務活動費を飲食やゴルフなどに使った富山市議が8月に辞職した。似たような地方議員の税金乱費が、各地でぼろぼろと見つかった。

*

国会はさながら「安倍1強」劇場だった。安倍晋三首相は夏の参院選に勝ち、自民党総裁の任期延長に異論も出ない。

「結党以来、強行採決をしようと考えたことはない」

「こんな議論を何時間やっても同じですよ」

首相の答弁は、ぞんざいさを増し、与党は「数の力」で採決を強行していった。

国連平和維持活動（PKO）に派遣する自衛隊に「駆けつけ警護」の新任務を与えた。強引に憲法解釈を変えた安全保障関連法の初めての具体化だが、首相の言葉は軽かった。

「もちろん南スーダンも、例えば我々が今いるこの永田町と比べればはるかに危険な場所」

南スーダンでは武器で人が殺されている。それを稲田朋美防衛相はこう説明した。

「それは法的な意味における戦闘行為ではなく衝突である」

この種の「言い換え」が増えた。沖縄県でのオスプレイ大破は「不時着」だった。安倍政権は「積極的平和主義」で「武器輸出三原則」を葬り、「防衛装備移転三原則」と称している。

*

ご都合主義的な言葉づかいの極みも、首相の6月の消費増税先送り会見で飛び出した。

「再延期するとの判断は、これまでの約束とは異なる新しい判断だ」

「新しい判断」は公約違反の逃げ口上だ。2年前には「再び延期することはない。ここでみなさんに、はっきりとそう断言する」と言ったのだから。

しかも国会での追及をかわそうと、閉会直後に表明した。ところが、野党も増税延期を唱えていたため、参院選の争点にすらならなかった。

「確実な未来」である人口減少と超高齢社会に備えるための国民の負担増を、政治家が先送りし、多くの有権者がそれを歓迎、あるいは追認した。

医療も介護も年金も生活保護も子育ても、財源難にあえいでいる。この厳しい現実から目をそむけ、社会全体が「何とかなるさ」とつぶやきながら、流されてゆくかのようだ。

その流れは、政治家の粗雑な答弁や暴言をも、のみ込んでしまっているようにも見える。

この夏、101歳で逝ったジャーナリスト、むのたけじさんの著作に次の一節がある。

「(日本人が) ずるずるべったり潮流に押し流されていくのがたまらなかった」

敗戦直後の世の中への感想だが、どこか現在に通じないか。

*

9月、安倍首相は所信表明演説で言い切った。

「非正規（労働）という言葉、みなさん、この国から一掃しようではありませんか」
だが、働き方の問題は深刻かつ多岐にわたる。

「保育園落ちた日本死ね!!!」

この匿名のブログへの反響の大きさが、待機児童問題の窮状を物語っている。

過労自殺した電通の女性社員（24）の言葉も切ない。

「大好きで大切なお母さん。さようなら。ありがとう。人生も仕事もすべてがつらいです」

衝撃的な事件があった。

相模原市の障害者施設で19人を殺害した男は言った。

「障害者は生きていても無駄だ」

この異常な偏見に対する確固たる反論を、だれもが心に堅持し続けねばならない。

ことしも、いじめを苦しめた自殺を防げなかった。原発事故の自主避難先で、いじめられた少年の手記が話題になった。

「いままでなんかいも死のうとおもった。でも、しんさいでいっぱい死んだからつらいけどぼくはいきるときめた」

それぞれの「言葉」が、ニッポンのありのままの姿を映している。だから聞き流すまい。立ち止まって受け止めよう。

このまま来年も流されてしまわぬように。

社説：年の終わりに 相模原の事件を忘れない 信濃毎日新聞 2016年12月31日

世の中があの日を忘れてしまえば、また同じことが起こるかもしれない。事件を風化させてはいけな—。

相模原市にある知的障害者施設の入所者が殺傷された事件で重傷を負った尾野一矢さんの父親、剛志さんの言葉だ。一年の終わりに、あらためて胸に刻みたい。

7月26日。19人の命が奪われ、職員を含め27人が負傷した。

逮捕された男は、事件の5カ月ほど前、精神疾患と診断されて措置入院していた。自傷他害の恐れがある患者を強制的に入院させる制度である。

<差別に目を凝らす>

退院後、医療や福祉の関わりは途切れていた。再発防止に向けて政府が設けた有識者の検討チームはそれを踏まえ、措置入院した患者を退院後も継続して支援する仕組みを提言している。

容疑者は精神鑑定のため留置されている。精神疾患が犯行に結びついたとは決めつけられない。精神医療の問題に議論を閉じるべきでもない。患者のためであるはずの支援が犯罪防止のための監視強化に向かわないかも心配だ。

凄惨（せいさん）な事件の背後には、容疑者が抱いた強い差別意識がある。そのことにこそ目を凝らしたい。

障害者は不幸をつくることしかできない、抹殺することが日本と世界のためになる—。事件の前、衆院議長の公邸に持参した手紙で、容疑者は訴えていた。

障害者を社会の役に立たない存在とみなして虐殺したナチスの優生思想にそのままつながる。それが、この社会に深く巣くう問題であることを事件は突きつけた。

「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する」。そう定めた優生保護法が1996年まで日本にはあった。

<声上げられぬ人たち>

法は改められたが、命の選別につながる考えを私たちの社会はどこまで克服できたのか。

向き合うことを避けてはこなかったか。

事件で亡くなった19人は、いまだに一人も名前が公表されていない。そのことにも、差別が根強く残る現実が映し出されている。

障害者、家族にもたらした恐怖は計り知れない。「車いすで街を移動していて、ふいに誰かに襲われるような恐怖心に駆られることがある」。脳性まひで体に障害がある東京大准教授の熊谷晋一郎さんは語っている。

標的にされているのは障害者だけではない。少数者をさげすみ、あからさまに排斥する主張は社会にはびこっている。

在日韓国・朝鮮人への差別をあおるヘイトスピーチは、対策法の施行後も収まっていなかった。7月の東京都知事選には、排外的な街宣を繰り返してきた団体の元会長が立候補し、11万票を得た。

大人の社会のゆがみは、子どもたちにも暗い影を落とす。福島原発事故で避難した子が、学校でばい菌扱いされ、「近くに来るな」などといじめられた事例が各地で明らかになっている。

ハンセン病患者への差別が、当事者や家族に苦しみを強いてきた歴史も見落とすことができない。強制隔離政策の根拠となった「らい予防法」の廃止から20年を経ても、根は断てていない。

家族たちは今年、国に賠償と謝罪を求める集団訴訟を起こした。原告の大半が名前や顔を明かしていない。その後ろに、なお声を上げられない多くの家族がいる。

戦後も半世紀余にわたって隔離政策が続いた背景には、社会の大多数の人の無関心と暗黙の了解があった。相模原の事件をめぐることも、障害者や家族が受けた衝撃の大きさを社会が広く共有しているようには見えない。

容疑者一人が、おぞましい考えにとらわれた“怪物”なのか。私たち自身の中にも怪物は潜んでいないか。そのことを見据えずに、差別や優生思想を乗り越えていく手だては見つからないだろう。

<命の尊厳を守る責任>

事件は市街地から離れた施設で起きた。重度の障害者の多くが地域で暮らせず、施設に入らざるを得ない状況は変わっていない。それが障害者を社会から見えない存在にしまっている。

障害者は隣近所で生きなければならない。脳性まひの当事者団体「青い芝の会」の中心的な存在だった故横田弘さんはそう語っていたという。

姿が見え、声が聞こえる距離にすることが、障害者について知る出発点になる。施設を閉じた場所にしないこと、重い障害があっても地域で暮らせる社会的な支えを拡充することが欠かせない。

障害がある人も、ない人も、あらゆる人が社会から排除されてはならない。命の価値に優劣はない。誰もが尊厳を持つ個人として尊重され、平等に生きられる地域、社会をどうつくっていくか。

差別や排除を正当化する主張に対しては、許さない意思を明確に示し、社会全体で立ち向かう必要がある。責任を担う一人として何ができるか。それぞれが考え、自ら一步を踏み出したい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

